

青少年施策における社会化言説と今後の課題 —青少年文献データベースを活用した調査研究—

西村美東士（徳島大学大学開放実践センター）

1 わが国の青少年施策における社会化言説

1985年の臨時教育審議会「教育改革に関する第1次答申」以来、90年代の青少年（教育）施策は、その「個性重視」の考え方に大きな影響を受け続けてきた。他方、たとえば養老は文部科学省の施策を批判し、「個性」ではなく「多くの人とわかり合えるための手段」としての「共通了解」を追求することが文明の自然な流れだと主張している（養老孟司『バカの壁』新潮新書、2003年）。

しかし、第1部会では新しい教育理念として「個性主義」（個性の最大限の開発）が提起されており、これを「現状の教育の枠内での言葉に置き換えられた」（臨教審第1部会委員中内功）結果として「個性重視」という言葉が使われたのだ。

わが国の青少年（教育）施策においては、少なくとも臨教審以来、個性化と対抗したり矛盾したりする形で社会化言説が混乱を伴って展開されてきたと考えられる。

2 青少年援助としての社会化

発表者は1989年度から『青少年問題に関する文献集』（当初は総務庁青少年対策本部）における「社会」「文化」関連の文献の解題に関わってきた。そこでは、対策からサービスへ、サービスから教育（自己成長の援助）へ、という大きな流れを見ることができる。他方、「青少年問題」が発生するたびに、施策、教育、研究、さらには世論やマスメディアの論調において、教育としては当然の社会化機能の発揮があらためて訴えられたりもしたが、ときには今まで積み上げられてきた「学習者中心」「青少年主体」の援助という基本姿勢が置き忘れられ、外圧としての強力な「社会化機能」の発揮や規範意識の形成を求める言説が繰り返されたりもしてきた。

学生の就職活動の切実さなどを見ると、社会化に向けた若者自身の欲求には大きいものがあると考える。そこを出発点にしてこそ、有効な社会化施策が実現できるのであろう。「規範」についても、若者の内側に取り入れられてこそ意味をもつものと考えられる。

3 教育における「個人化」機能

学習は本来個人的事象である。教育はその援助をし、自分の頭で考えるように促そうとする。さらには、私は、現代青年の自己決定阻害要因の一つとして、成育歴や教育、仲間関係のなかで交流分析でいう「フリーチャイルド（自由でわがままな子ども心）」がむしろ萎縮している現状を指摘したことがある（『總しの生涯学習』学文社）。その解放も教育の重要な役割なのではないか。

これらの教育には、「個性化」というよりむしろ「個人化」と呼ぶべき機能があると考えたい。つまり、「社会の一員として（よく）生きられるようになる」ことが社会化だとすれば、「一人で（よく）生きられるようになる」ことが個人化であり、個人のなかでは両者は不可分のものなのである。また、社会の側も、個性を発揮できない若者に現実には手を焼いていると思われる。社会化の伴わない個人化傾向も困りものだが、個人化の深みのない「社会化」は意味が希薄といえよう。

4 青少年文献データベースの活用

現在、科研費によって「青少年問題に関する文献データベース」を構築しつつある。これは当センターHP上で一般に公開している。これにより、文献の要旨における「社会性」と「個性」のヒット率の経年変化を示しておく（文字数により調整してあるため実際の%の数字はかなり下回る）。青少年施策が「個性」から「社会性」に転換すればすむということではなかろう。2000年以降の社会化言説のゆくえに注目したい。

社会性（実線）と個性（破線）のヒット率の比較（n=3149）

